

## 無教会主義について

内村鑑三

無教会主義とは、教会は有つてはならぬということでない。有るも可なり無きも可なりということである。神の生命たるキリスト教が制度でありオルガニゼーション（組織体）であるべきはずがない。生命は時には形態を取つて現われ、時には形態なくして生命そのものとして存在する。生命はヘブライ語で言うルーアクである。風である。息である。「風はおのがままに吹く。なんじ、その声を聞けども、いずこより来たり、いずこへ行くを知らず。すべて霊によりて生まるる者はおくのごとし」（ヨハネ伝三・八）とあるそれである。この風の吹く所に神の生命がある。そして風に形態のないように、「霊によりて生まるる者」すなわちキリスト信者に形態がない。信者は教会員ではない。彼は神の風に吹かれて霊によりて生まれたる者である。彼が無形たるや言うまでもない。

生命は形態を取りて現わるるものであるから、神の霊が時に教会の形態を取りて現わるるは少しもふしぎでない。われらはかかる形態を貴び、時におの

が身をこれにゆだねるも、決して悪い事でない。しかしながら神（しん）と形（けい）とが同視せらるる時に弊害は百出する。そして形が神を圧する時に、神は生きんがために形にそむき、これと離れ、これを捨てざるを得ない。無教会主義はかかる場合に起こる主義である。貴むべき、なくてはならぬ主義である。

その意味において、ギレアデの野人、テシベ人預言者エリヤは無教会主義者であつた。彼によりて、イスラエルの内に消えんとせしエホバの生ける信仰が復興持続されたのである。またテコアの牧夫アモスは預言者にして無教会主義者であつた。彼は彼に沈黙を命ぜしベテルの祭司アマジヤに答えて言つた、

われは預言者（職業的預言者すなわち宗教家）にあらず、また預言者の子にもあらず。われは牧者なり。桑（くわ）の木を作る者なり。しかるにエホバ、羊を飼う所よりわれを取り、行きてわが民に預言せよと、われに命じたまえり（アモス書七・一四）

その他ルーテルも新信仰唱道当時は純然たる無教会主義者であつた。彼は新たに教会を起すに至つて法王以上の法王となつた。ミルトンは終わりまで高貴壯嚴なる無教会主義者であつた。カーライルも

そうであつた。トルストイもそうであつた。そして余の知る範囲において、組合教会、バプティスト教会、その他すべて自由と生命とを新たに世に注(つ)ぎ込みし教会は、熱烈なる無教会主義をもつて始まつたものである。生ける信仰が硬化する時に教会に化するのである。教会は信仰の化石である。信者が最も恐るる事は、彼の信仰が教会化せん事である。

(一九二七年十月『聖書之研究』)

「無題(私は無教会主義を)」

内村鑑三

私は無教会主義を唱えた。今より三十年前、人がいまだこれを唱えざる時に唱えた。ことに教会が今のごとくに衰えず、教職と宣教師とが今よりはるかに強い時にこれを唱えた。当時(そのとき)無教会主義を唱うるは、あざけられ、そしられ、信者全体より仲間はずれにされることであつた。私は当時この

主義を唱えて、孤独は当然まぬかれ得なかつた。まことに苦しい、幸いなる時であつた。

私の無教会主義は主義のための主義でなかつた。信仰のための主義であつた。人の救わるるはその行為によらず信仰によるとの信仰の帰結として唱えたものである。ゆえに罪の悔い改めの経験なき者はとうていこれを解し得なかつた。されどもこの貴き経験を持たせられし者は喜んでこれを迎えた。教会攻撃のための主義でなかつた。信仰唱道のための主義であつた。まず第一に十字架主義の信仰、しかる後にその結論としての無教会主義。十字架が第一主義であつて、無教会主義は第二または第三主義であつた。私が時に強く教会を撃つたのは、その信仰において福音の真理に合わざるものがあつたゆえである。私は傲慢(ごうまん)無礼の米欧宣教師を憎んだが、いまだかつて教会そのものを憎んだことはないつもりである。その事は、私が無教会主義を唱えながらも、幾回となく彼らの要求に応じて彼の援助におもむいた事によつてわかる。教会は私を助けてくれなかつたが、私は幾回か彼らを助けたと信ずる。けだし私は教会の悪い半面と共に善き半面のあることを知つたゆえである。腐つても鯛(たい)の骨であ

る。教会は腐つても、聖霊ははまだ全くその内より去りたまわない。そして私はその内にとどまりたもう聖霊のゆえに、教会を尊敬せざるを得ないのである。

私はかく唱えて、教会と和睦せんと欲するのでない。私は教会や宣教師に好まれざることを好む。教会にきらわれるは、私の信仰の純真を守るがために必要である。私がおもひ今日まで教会と親しんだならば、私もまた彼らと共に信仰墮落の淵に沈んでいたであろう。教会に受けられんがためにあらず、私の立場を明らかにせんがために、私はこの事を言う、すなわち私は「今日流行の無教会主義者」にあらずと。私に、弱い今日の教会を攻むるの勇氣はない。私は残る僅少の生涯において、いつそう高らかに十字架の福音を唱えるであろう。そしてこの福音が、教会をこぼすべきはこぼち、立て直すべきは立て直すであろう。私は教会問題には無頓着なる程度の無教会主義者である。教会という教会、主義という主義はことごとくこれを排斥する無教会主義たらんと欲する。

そはわれ、イエス・キリストと彼の十字架につけられし事のほか、何をも知るまじと心を定めたればなり（コリント前書二・一二）

（一九三二年三月『内村鑑三追憶文集』）